

宮沢賢治のスケッチ「公衆食堂(須田町)」(「東京」ノート」所収)について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉浦, 静 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6844

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



宮沢賢治のスケッチ「公衆食堂（須田町）」

（「『東京』ノート」所収）について

杉 浦 静

スケッチ「公衆食堂（須田町）」は、「『東京』ノート」の49頁に赤インクを用いて記入されている。東京を題材とする短歌・短章の集成である「東京」中の「一九二一年一月より八月に至るうち」の章に収められた一篇である。この章は、一九二一（大正10）年一月の上京から八月の帰郷までの滞京生活中のスケッチや短章を、その題材の日付順に配列したものと推定される。

「公衆食堂（須田町）」は、スケッチ「『日過ぎ来し雲の原は』」の三篇後ろに置かれ、「『われはタルゲを名乗れるものは』」の前に位置している。「『日過ぎ来し……』」は、後に文語詩「叔母枕頭」に改作され、その逐次形の中に「七月はさやに来れど／人はなほ故知らに病み、／日過ぎ来し白雲の野は／さびしくも掃き浄めらる」と組み込まれることになる。文語詩題名中の「叔母」とは、瀬川コト。賢治の母イチの末妹で、賢治の一歳上であった。瀬川コトは、この年京橋の古宇田医院に入院していて、賢治は一月末の上京後二月頃よりしばしば見舞いに訪れていた。この文語詩では、「七月はさやに来たれど」とあるように、七月初旬の夕刻の空に、掃かれたように伸びる巻雲（すじ雲）を背景にして、叔母の病気が描

かれている。スケッチ「[日過ぎ来し雲の原は]」は、後にこのように文語詩化されるところから、一九二二（大正10）年七月初めの夕刻の空にかかる雲のスケッチと読めるのである。

「[日過ぎ来し雲の原は]」に続く「[かくまでに]」には、「新しき／見習士官の肩章をつけて／その恋敵笑って過ぐる」という一節がある。同年七月三日付の保阪嘉内宛書簡には「あなたの貴重な日曜日を私の所へお潰しになつてはあまりお気の毒です。見習士官なら外泊でせう。」と、保阪が見習士官になっていることを意識した文言もあることから、この一節には保阪の影が落ちていると読むことも可能である。そこでこのスケッチの時期をこの頃と考える事も可能だろう。（しかし、これはあくまでも可能性である）

次の「[聖なる窓]」は、帝国図書館の窓をスケッチしたもの。六月二九日付の母宛書簡には「食事も十二三銭出せば、実に立派なものです。図書館の中は、どうも高くて困ります。」と書き、七月二三日付の関徳弥宛書簡には、「図書館へ行つて見ると毎日百人位の人が「小説の作り方」或は「創作への道」といふやうな本を借りやうとしてゐます。」という一節もあることから、この時期には足繁く帝国図書館に通つていたと思われる。そこでの体験に基づいて書かれたのが、この「聖なる窓」および「公衆食堂（須田町）」の直後に置かれている「[われはダルゲを名乗れるものは]」である。

これらから「公衆食堂（須田町）」は、一九二二（大正10年）七月頃の題材を書いたものと見てよいであろう。

同年一月末上京の直後には、文信社にてガリ切りに「朝八時から五時半迄座りつ切りの労働」（二月三十日付関徳弥宛書簡）をしていたが、三月には「今は午前丈或る印刷所に通ひ午后から夜十時迄は国柱会で会員事務をお手伝しペンを握みつゞけです。」（三月十日付宮本友一宛書簡）と、国柱会での奉仕活動が加わっている。この頃は、「父は出奔後の生活を心配して、住所がわかると早速近江銀行東京支店支払の小切手を送った。それに対して受取人の名を消し「謹んで抹し奉る」と書いて送り返した。これを何度かくり返し、父は困り切つて四月の上京となる。」と年譜（『新校本宮澤賢治全集』第16巻下）にあるように、実家からの金銭援助を固辞しつつ、文信社での仕事からの収入のみでの生活はかなり困窮して

いたようであった。しかし、本格的に「法華文学」を志すようになってからは、「夜は大抵八時ころ帰」（七月三日付保阪嘉内宛書簡）るようになっていたし、「飯を二回の日が多い」が、「うちから金も大分貰ひましたよ。左様十五円に二十円に今月二十円来月二十円それから十円に十円とられました。」（七月一三日付関徳弥宛書簡）と書くように、実家からの援助を受けて経済的には随分と余裕が出たように見える。おそらく、その分文信社での労働時間が図書館通いや執筆に振り向けられたのではないかと推測されるのである。

このような中で書かれたのが、「公衆食堂（須田町）」である。

このテキストの〈公衆食堂〉が、どこを指すのかについて、浜垣誠司氏は、自身のブログ「宮沢賢治の詩の世界」の記事「2008年2月8日 「公衆食堂（須田町）」について(1)」¹⁾「2008年2月10日 大正期東京市の「公衆食堂」」「2008年2月17日 「公衆食堂（須田町）」について(2)」で、種々の可能性を博搜しながらも「私としては、題名の「公衆食堂」という言葉を文字通り受けとるか、現在の「大衆食堂」に相当するような一般的意味で用いたと考えるか（当時そのような用法があったかはわかりませんが）、というところが一つの分かれ目かと思うのですが、いずれの店とも決めがたい状況です。」（2008年3月6日 光太郎・食堂など補遺）と結論づけた。

また、浜垣氏の三月六日の記事中では、加倉井厚夫氏のブログ「賢治の事務所」の「緑いろの通信」2008年3月3日号に、「作品舞台の有力な候補として「昌平橋簡易食堂」を挙げていることが紹介されている。¹⁾

さらに遠藤哲夫氏は、「宮沢賢治の「東京」ノートと神田の食堂」（『みんなの神田神保町御茶ノ水』京阪神エルマガジン社、二〇一七年六月）で「『公衆食堂（須田町）』の食堂はどこか。賢治が家出する前年に東京市が開設した公衆食堂の「昌平橋食堂」の可能性が高い。／この「須田町」は、町名ではなく、都電になる前の市電の須田町停留所があった須田町交差点と考えれば、その場所は、今より昌平橋に近いところにあった。そこは万世橋駅の広場でもあり市電の大ターミナルで賢治の記憶に残ったのだらう。（中略）「昌平橋食堂」があった場所は不明だが、万世橋駅開業にともない廃止され

た昌平橋駅あたりなら、須田町交差点から広々とした万世橋駅前広場越しに見えたかもしれない。」と昌平橋食堂の可能性を提示している。なお、後述するように、昌平橋食堂は、「東京市が開設」したものではないし、賢治の上京する前年（大正九年）の開設ではない。

私も、加倉井・遠藤両氏と同様に、この賢治の「公衆食堂（須田町）」は、昌平橋食堂を描いたものだと考えるが、以下にあらためて、その根拠を含めて、考察していこう。

1

一九二二（大正11）年四月刊の『遊覧 東京案内——一九二二年版——』（大東社）には、「神田区」の案内中に次の記述がある。

神田慈善食堂 ④須田町 これは、市立公設食堂以外にあつて、新橋平民食堂と共に有名な公衆食堂で社団法人神田慈善協会の経営。

また、同書下段には「市内公衆食堂所在地」として

市設神楽坂公衆食堂（肴町） 牛込区横寺町

市設車坂公衆食堂（車坂町） 下谷区車坂町

法人神田慈善食堂（須田町） 神田区須田町

法人平民食堂（芝口） 芝区汐留町

市設新宿公衆食堂（新宿終点） 新宿追分

同様の東京案内である池田政吉『欺されぬ東京案内』（東京案内社、一九二二（大正11）年五月）も、「簡易食堂」につ

いて次のように記述している。

●簡易食堂

東京市公設公衆食堂は万世橋ガード下の昌平橋食堂、牛込神楽坂簡易食堂（牛込区横寺町一番地）下谷車坂の公衆食堂（下谷区車坂町一番地）と外に芝区烏森町の平民食堂（医師加治時次郎²の経営に成るもの）は簡易食堂の中一番古い歴史を持つて居る、孰れも大繁盛で、食事時は人の山をなして、満員の有様、（以下略）

これらの案内は旅行者や学生向けに簡便に作成されたものであるためか、記述に正確さが欠けるところもあるが、「神田慈善食堂」や「昌平橋食堂」が、公衆食堂として位置づけられていることがわかる。また、ここから簡易食堂と公衆食堂がカテゴリーの違いであることもうかがえる。なぜなら『欺されぬ東京案内』では、同じ「簡易食堂」として昌平橋食堂や神楽坂簡易食堂の次に並べられているのが、「▲世にも軽便の喰物」として「三越と白木の食堂」であるからである。モダンでハイカラな都市生活の象徴ともいえるデパートメントストア（三越、白木屋）の食堂が、「お客様に便利で軽便で廉直」なものとして、所謂公衆食堂である市設の公設食堂、民営の公衆食堂と並列されているのである。

さらにまた、「本邦文化の源泉地たる東京を視察せんとする教育家」を対象に編まれた『東京視察案内』（明治図書、一九二二（大正11）年六初版）には、「至極簡便に而も安価に、高尚に腹を満たす事が出来るようになった」として、その場所を

□三越の食堂、□白木屋の食堂、□第一相互館の食堂（京橋々畔）、□伊藤松坂屋食堂、□村井銀行地下室（日本橋畔）、□新橋駅、万世橋楼上の食堂、□カフェーパウリスタ（出雲町下車）、□豆しろ「簡易日本食堂」（新橋駅前）と列挙した後で、「更に簡単に食事を済ませようとするには市内各処にある蕎麦屋か簡易食堂に入るに限る」として、「簡易食堂の主なるもの」として次の四種六箇所を挙げている。

□昌平橋食堂（須田町又は松住町下車）、□公衆食堂（市営）（新宿追分下車）、（下谷車坂下車）、（牛込肴町下車）、

宮沢賢治のスケッチ「公衆食堂（須田町）」（『東京』ノート）所収）について

□平民食堂（土橋下車）、□錦町食堂（神田錦町三丁目下車）

これら東京案内の類では、食堂の場所を示すのに正確な住所よりも、最も近い市電の停留所名や近辺の有名な町名を示すのが通例になっていることがうかがえる。

だからこそ、昌平橋食堂（神田慈善協会簡易食堂）の所在地は、「神田区昌平橋南詰」（大正九年十二月刊の『東京社会事業名鑑』東京市社会局）、「神田区須田町十五番地」（大正十一年九月刊の『東京府社会事業概観』東京府社会事業協会）であるにもかかわらず、これらの案内では、須田町とのみ記されているのだろう。

社会事業関係の資料での扱いはどうだろうか。

大原社会問題研究所編の『日本社会事業年鑑（大正八年）』（大原社会問題研究所出版部、一九二〇（大正九）年五月）では、社会事業の一つとして「簡易食堂」の項を立て、次のように記している。

簡易食堂は大正七年一月、東京市芝区烏森町に於て、社会政策実行団の事業として平民食堂の名を以て設立されたのを嚆矢とする。同食堂は一時に六十人を容るゝの設備である。当時料金は朝八錢、昼夜各々十錢であつた。此の食堂は薄給者、労働者、店員、学生が主なる来客である。（中略）尚、八月米騒動の以来は生活緩和の一策として、簡易食堂は一種流行の形を以て諸方に設立さるゝやうになつた。即ち九月には大阪市に於ては幸町食堂、天満食堂が市営として設立され、十月には東京に於て神田慈善協会の経営に依りて昌平橋食堂、神戸市にては、市営の食堂。（中略）尚簡易食堂は一般公衆を相手とするものばかりではなく、官庁、会社等に於て一般職工、労働者に対して安価なる食事を供給する目的で食堂の開設されたものは少くない。蓋し生活費の高騰に伴ふ緩和策であつて、一般簡易食堂の例に倣つたものであらう。（中略）簡易食堂なるものは敢て斬新なる趣向ではない。営利的事業としては、日傭労働者に対して所謂縄縄暖簾なるものがある。唯簡易食堂は清潔にして実費を以て供給され単に労働者のみならず、総ての薄給者に利用さるゝ点が其の特徴である。

また、『東京府管内 社会事業要覧 大正十四年二月現在』（東京府社会事業協会、一九二五（大正14）年五月）には、「公衆食堂」として、公設（東京市社会局経営）・私設をあわせ二十箇所の食堂が掲げられている。各食堂の名称は、「○公衆食堂」「○○簡易食堂」「○○食堂」と設置母体によりさまざまである。

これらのうち、「公衆食堂（須田町）」が書かれた一九二二年夏に営業していたものは次のとおり。（括弧内は開設年月）、

昌平橋簡易食堂（一九一八年十月）

平民食堂（一九一八年四月）

東京市神楽坂公衆食堂（一九二〇年四月）

東京市上野公園公衆食堂（一九二〇年五月）

浄土宗労働共済会簡易食堂（一九一七年二月）

なお、先述の『東京府社会事業概観』には、この他に、神聖労働簡易食堂（一九二〇年二月開設）が第四位の利用人数を示す簡易食堂として掲げられている。

『社会事業要覧』では、〈公衆食堂〉のカテゴリーのなかに簡易食堂は含まれているが、それ以前に刊行された『社会事業概観』では、逆に〈簡易食堂〉のカテゴリーに公衆食堂が含まれている。これは、食堂の種類として分類するか、社会事業の種類としての分類による相違と見ることが出来るが、大まかな傾向としては、このうち公設の簡易食堂が公衆食堂の名前で、次々と設置されてゆくに従って、公衆食堂の呼称が優勢になってゆくようである。

こうしてみると、宮沢賢治は神田慈善協会の経営する昌平橋簡易食堂を、公衆食堂の一つと認識して、その所在地を多くの東京案内などにならって須田町とし、「公衆食堂（須田町）」と記述したと考えられるのである。

さて、簡易食堂の開設については、一九二二（大正11）年当時は次のように見られていた。

米価の暴騰により下層階級者は生活を脅かさるゝに至りしかば大正七年に入り民間有志の間に之を憂ふるものあり、

宮沢賢治のスケッチ「公衆食堂（須田町）」（『東京』ノート）所収）について

廉価に食物を供給せんとし自治体の計画に先んじ平民食堂、浄土宗労働共済会簡易食堂、神田慈善協会簡易食堂等の設立を見るに至れり。かくて大正九年に入つて神聖労働簡易食堂、東京市立神楽坂公衆食堂、同上野公衆食堂等設立せられたり。これ等の簡易食堂は主として下級労働者を顧客とすれども神楽坂、上野の両食堂は単に労働者を顧客とするにあらずして一般中産以下の利用する処たり。上野の食堂の如きは上野遊覧の人々も亦利用するもの多し。（『東京府社会事業概観』東京府社会事業協会 大正11年9月17日発行）

また、先に引いた大原社会問題研究所編の『日本社会事業年鑑（大正八年）』では、「簡易食堂」として次の説明がある。やや長いが、実情の簡潔な整理として、再引する。

簡易食堂は大正七年一月、東京市芝区烏森町に於て、社会政策実行団の事業として平民食堂の名を以て設立されたのを嚆矢とする。同食堂は一時に六十人を容るゝの設備である。当時料金は朝八錢、昼夜各々十錢であつた。此の食堂は薄給者、労働者、店員、学生が主なる来客である。／同年六月には大阪自彊館は市内南区日本橋東一丁目に同様の食堂を開催した。又名古屋市には同年七月前記社会政策実行団の事業として西区上畠町に平民食堂が開設された。

／尚八月米騒動の以来は生活緩和の一策として、簡易食堂は一種流行の形を以て諸方に設立さるゝやうになつた。即ち九月には大阪市に於ては幸町食堂、天満食堂が市営として設立され、十月には東京に於て神田慈善協会の経営に依りて昌平橋食堂、神戸市にては市営の食堂。十一月には東京市に麻布簡易食堂（麻布区青年会経営）、神戸市に東部食堂。十二月には大阪市に市営九条食堂が設立された。越えて本年八年度に入つては（中略）十二月には加藤時次郎氏の設立に係るパン食堂が東京市浅草駒形町に開設された。尚、簡易食堂は一般公衆を相手とするものばかりではなく、官庁、会社等に於いて一般職工、労働者に対して安価なる食事を提供する目的で食堂の開設されたものは少くない。蓋し生活費の高騰に伴ふ緩和策であつて、一般簡易食堂の例に倣つたものであらう。（中略）簡易食堂なるものは敢て斬新なる趣向ではない。営利事業としては、日雇労働者に対して所謂縄暖簾なるものがある。唯簡易食堂は清

潔にして実費を以て供給され単に労働者のみならず、総ての薄給者に利用さるゝ点が其の特徴である。／食費は朝食を八錢、昼夜を各十錢の定めとする処がある。又定食の外に更に副食物を売る処があり、飯、菜だけを家庭の所望に依りて販売する場所もある。尤も食費は八年度に入つて普通十二錢に値上げされた。

昌平橋食堂の設立者であつた中村舜二は、『大東京綜覧』（一九二五（大正14）年六月、同刊行会発行）において、「昌平橋簡易食堂の業績」として、設立経緯、利用者数等を次のようにまとめている。

民間篤志家の経営に係るもので、公衆の食堂として社会事業の範を示して居るものは、何と云つても昌平橋簡易食堂であらう。米騒動の体験に発奮した神田区の名譽職と有志により、公共的に組織せられた神田慈善協会の経営で、創業以来七年を終始し、現に五十名に近き従業員の数多は、苦学生を採用して彼等の勉学に力を与へて居る。大正七年の暮に開業してから、同十三年末に至るまでの供給食数は、（中略）実に六百余万の夥しきを算し、現に日日四千人以上の大衆を吞吐して居る。

この後に掲載されている表によると、賢治が滞在した大正十年前半（十年一月から六月）には、供給人員53018人である、ざつと計算すると、一日当たり三千人、一食当たり千人が利用していることになる。

なお、『東京府社会事業概観』（同前）の簡易食堂の項に掲げられた、大正十年度の各食堂の「平均一日に利用する人数」は、次のとおりで、『大東京綜覧』における概算とほぼ同じである。

名称

利用人員

東京市立神楽坂公衆食堂	二、一一七
東京市立上野公衆食堂	二、五九六
浄土宗労働共済会簡易食堂	二六一
神田慈善協会簡易食堂	三、一九八

宮沢賢治のスケッチ「公衆食堂（須田町）」（「東京」ノート）所収について

平民食堂

七三三

神聖労働簡易食堂

九〇〇

合計

九、八〇五

このように、いずれの資料によっても大正七年頃からの米価の高騰、それにもとづく米騒動などを契機として、困窮する労働者民衆に対して、安価に食を提供する施設として公設・私設の公衆食堂・簡易食堂が設置されたという経緯が語られている。

このように開設された簡易食堂・公衆食堂のなかでは、神田慈善協会簡易食堂（昌平橋簡易食堂）が最も利用者数の多い食堂であったし、新聞記事等の取り上げ方を見ても、最も有名であった。⁽³⁾

中村舜二が、後年記した『吞牛撲稿——中村舜二八十年の歩み』（私家版 一九六一（昭和36）年十一月）には昌平橋簡易食堂の開設のころの回想がある。ここでは、市会議員となった中村は、大正七年の米騒動の後、庶民の困窮救済のため、東京市長に「市営の公衆食堂を始め、小売市場、公益質舗、簡易宿泊所等々の開設が急務であり、就中公衆食堂が焦眉の急であることを力説」したが、市には不可能であったので、「自分の手で遣る以外に手は無い」と確信して、「私は区内の空地を物色して、幸に今の昌平橋脇の国電ガード下、約七十坪に市の砂利置場があるのを見附け、（中略）その土地の無料使用の許可を得たので、直ちに食堂の設計に取掛ったが、当時の金でガード下の建設即ち事務室、椅子テーブル、食券売り場等々で約二千五百円、食器、竈、水道、瓦斯等々に二千五百円、その計約五千円と見積もられた。」が、「昼夜兼行の突貫工事を進める一方、食器類の調達に東奔西走、十月の末に愈々落成したので、昌平橋の橋名に因み昌平橋簡易食堂と命名、当時の天長佳節十一月三日を卜して、…開業した。」ということであった。さらに、ここで提供された食事は、「朝食八銭、昼と晩が各々十銭で、一食約一合五勺、大丼に豚汁一ぱいと香のものの、筋肉労働者でも満腹できる多量である。」というものであった。

この食堂の開業日の盛況は、「日本で最初の非営利の公衆食堂とあって、米騒動の後ではあり、好評噴々、開業式の終った午前十一時には延々長蛇の食券売場への行列整理に、警察の出張を乞うと曰った大騒ぎ、」と回想されるようなものであった。

なお、昌平橋簡易食堂の繁盛は宮沢賢治の滞京した大正十年中も続いていた。一九二一（大正10）年十月五日付東京朝日新聞朝刊五面には、「空席などは一つもなし——大繁盛の昌平橋食堂」というキャプションが付けられた食堂風景の写真とともに、「米高に賑はふ此頃の簡易食堂」との見出しで、昌平橋簡易食堂の賑わいが報じられている⁽⁴⁾。

この記事によれば、この日は、朝一三一四食、昼一九一四食がすでに売れ、夜のために一五〇〇食を準備しているという。しかも「毎日売切締出し」をするほどであるとも書かれている。さらに、この前日夕刻の混雑は、次のようにリアルに報じられている。

そぼ降る雨の昨夕、昌平橋際簡易食堂の食事時には五時開場の一時間も前から労働者、職工、商店員、学生、洋服着など千近くのお客が濡れ乍ら押すな押すなで入口に立ち尽した、そこへ開場合図の鈴がガランと一つ響いたと思ふ間もなく二方の入口に追つかぶさつた大群は全く怒濤のごとくにあの小狭い場内に殺到し数点の席は一瞬間に鮎詰め満員となる、入り遅れて土間に立往生の面々の表情は見るから惨めで場内に充ち渡る食器の響きの内に他の貪り喰ふ有様を咽を鳴らして待たねばならぬ、こゝの一食は十銭、膳には一合五勺余の飯を盛った丼に生烏賊と里芋の煮付と切牛蒡の油いための向ふ付とが並ぶ、之が六時頃の雑沓と来たら寧ろ物凄い程であつた。

「食器の響きの内に」「貪り喰ふ」客の「有様」と、食事時の混雑が浮かび上がるような記事である。

この混雑は開設以来続いていたもので、開設翌年（一九一九年）の二月二十日付読売新聞朝刊五面には、「胃の腑から凡百の社会問題／盛に簡易食堂を起せ」との強い主張のある見出しのもとに「◇簡易食堂を覗くの記事」の記事が掲載されている。少し長いが、宮沢賢治もこの中の一人であつたので、引用しよう。

神田慈善協会の昌平橋簡易食堂で朝（八錢）昼夕三食の食券を買ふ迄の混雑はお話にならない、夫でも中に入れるのは僥倖の方で何百人何千人の人が空腹を抱へ乍ら失望して帰つて行くか分らない、日本の都市には、特に我東京には此種の食堂が缺乏して居る、何故今少し増設されないのだらう、昌平橋のは敷地がない為之れ以上の拡張は不可能であるけれども、毎朝毎晩中に入らうと押し合ひへし合ひするため危険な玻璃戸は割竹で巖丈に鎧はれて居る、半天股引の労働者、制服制帽の学生、中折れマントのお勤人、胃の腑は不公平にも此の階級の人達ばかりを苦しめて居るのだ、食堂内には百人近くの人がギツシリ詰つて、桑を食ふ蚕の如く黙つて、只黙つて、飯を掻込み、豚汁を啜つて居る、斯うして朝は弁当を入れて四百五十人、昼は五百五十人、夕は六百人位の食膳が出る、育ちが良いらしく慎ましく食ふ田舎出の書生、嚙み下す事の遅さを自ら慊かしがる如な労働者、直径五寸もある大井には約一合五勺の内地台湾四分六の飯が盛り上げられてゐるが瞬くうちに平げられて、客は後から後から押すな押すとばかり――（中略）黒板には「今夕豚汁」と書かれてあつたが如何に彼等の食欲を唆る事であらうか、食堂が開かれて十五分も経たない内に客は早くも二三度新手が入り代つた（注、原文総ルビ。適宜ルビを省略した）

このように、主として安さゆえに、都市中下層労働者・市民・学生が殺到した感のある昌平橋簡易食堂であつた。確かに、社会政策上からは現実的に意義の高い食堂であつたことは間違いないだらう。しかし、安価で供給するために犠牲になるものがあつたことも事実である。

ここに、二つのルポルタージュがある。一つは、貝塚洪六「禁止遠視斜視乱視 Ⅱ 色眼鏡の東京新繁盛記」（「改造」大正九・九）、もう一つは、「神田橋と昌平橋食堂」（時事新報家庭部編『東京名物食べある記』昭和四・十二、正和堂書房）である。貝塚洪六は、社会主義者堺利彦のペンネーム。前者は「中の下階級の生活がいよいよ窮迫して、家庭らしい者を作る事が困難になり、或は弁当らしい弁当を持つて来る事も、それも注文して取寄せることも六かしくなり、さりとて厭な臭でのムツトする飯屋では我慢が出来にくいおいふ事」に、平民食堂、簡易食堂、公衆食堂などの「食堂といふ新現象

の哀れさ」があるとして、三箇所食堂をルポルタージュしたものの。後者は、時事新報に連載された「食堂めぐり」「名物食べある記」をまとめた本の内の一つ。「震災後の食堂繁盛、飲食店の簇出に刺戟されたもので、家庭人を吞吐するとの特に多いこれ等の食堂が、果して真に家庭人の享樂に價ひするか、又はどう改めたらよいか、家庭記者の立場からさうした点を検討する意味で初めた」というもの。だが、この「神田橋と昌平橋食堂」は、「百貨店や銀座辺の食堂は僕達には用は無い、一つ僕達行きつけの公衆食堂を巡つて下さい」との「一苦学生」からの投書に従つて行つたものである。この「食べある記」の対象としている「食堂」が「ブル階級」の利用するもので、貝塚（堺）がいうところの「中の下階級」の利用しうるのは「公衆食堂」だとの社会意識はこの記者たちにもあつたということである。従つて、これら二つのルポは、立場は異なるがいずれも、批評的意識に基づいて書かれているものということになる。

これら両者に共通するのは、味と飯のまずさである。貝塚のルポでは、

飯は矢張り井に盛つてある。蓋を取ると、プーンと臭ひがする。即ち外米の臭ひである。おかずには蒟蒻の味噌まぶしだ。別に沢庵が二片ある。先づ蒟蒻を一口口に入れて見たが、水臭いばかりで味が無い。次には飯を一口やつて見たが、之もボソボソして幾ら噛んでも飲みくだしにくい。成るほど俺も小さな貴族だなと考へた。

室内を見わたすと、色もさめた袴天を着た人、汗じみたシャツを着た人、髪の毛の延びてもつれた人、赤黒い顔に眼のギロギロに光つ人達が、皆熱心に井の飯を掻きこんである。彼等は今、食事にのみ全力を注いで脇目もふらない。彼等が食ふのは味はふのではなく、只すいた腹を膨らすのである。水くさいのボロボロするといふ事は問題でないらしい。順番を待ちかねてゐる人達は、前の人の立ち次第、争つて其のあとを腰かける。直ぐに又膳が来る。間もなく平らげて立つて行く。直ぐに又次の人が腰かける。之が十銭で一度の腹を拵へようとする人生のモガキである。

小さな貴族たる私は、飯を二箸三箸食つて、沢庵を一片かぢり、湯を一杯のんだだけで席を立つた時、隣席の人達に対し、給仕人に対して、極りの悪い、恥かしい思ひをした。

と書かれ、食堂を出た後の次のような感想がここに続く。社会主義者堺（貝塚）のルポの眼目はここにあると言っても良いところである。

今に新社会建設の希望と要求とを持つて来たらあの水くさい蒟蒻と臭い飯とでは我慢しまい。外の人が善美な食物に飽いてゐる限り、或は相当な食物を得る限り、彼等も亦た必ず其の善美と相当との分け前にあづかる事を強要するだろう。若し又、混乱の過渡時代に、矢張り暫くあの臭い物、水臭い物で我慢せねばならぬ場合があるとしても、其の場合には、彼等は最早や慈善を受けるのでもなく、他人から強制されて一食十銭に甘んずるのでもないから、彼等はある食堂を直ちに自分等の共同食堂として、我慢すべき事は寧ろ悦んで我慢しつゝ、建設の事業に働く事になるだらう。

『食へある記』中の昌平橋食堂では、

定食一点張りなので、四人の前へズラリ一様に会席膳式に同じものが並ぶ、井飯に生漬けの胡瓜四切と胡瓜もみ、井に盛られた茄子と玉葱と玉子にどぜう、どぜうは苦手のHが先づ棄権する。S「却々凝つたものを食べさせるが、折角だが味は宜くない、これだけのものを食べさせるんだから今一工夫して何とか相なものだがな」M「どぜうにしろ、玉子にしろどうして味が無いのが不審な位だ、つまり折角の材料もタシで壊して了ふんだらうか」H「胡瓜もみに胡瓜の漬物はつくね、他にも時節柄漬物はあり相なものを、不親切だなア」哀れやH、胡瓜一切れに恨みをこめる。小が武「僕の御飯、鍋底、この通りおこげとベタベタ飯、悲観」で一行四人、何だかうら悲しい気分になって、雨の中をとぼとぼと帰りました。

と、味の悪さ、献立の取り合わせ、飯の不具合などを、指摘し、決して満足できるものではないとの評価を「雨の中をとぼとぼ」にこめているかのようだ。

もう一点、貝塚の渋谷のルポの中で、着目すべきは、この食堂がガード下に作られているところと起因する環境である。

最初に昌平橋簡易食堂を、「鉄道のガードの下の穴のような処が即ち其の食堂である」と紹介し、食券を買って中に入ると

室が狭い、光線が少い、風通しが悪い、食卓も器具も皆きたない。それでも植木の鉢が一つだけ置いてあつたが、それは此の惨憺たる一室に風情を与へるよりも、寧ろ態とらしい滑稽を感じさせた。

とある。この狭くうす暗い食堂の室内は、大正十二年の関東震災後移転した食堂では改善されたと考えられるが、宮沢賢治が訪れた大正十年当時には、このような必ずしも衛生的とはいえないような劣悪な環境であつたと言わざるを得ないのである。

2

宮沢賢治のテキスト「公衆食堂（須田町）」は、一九二二（大正10）年七月頃の昌平橋簡易食堂を描いている。昌平橋簡易食堂の実際は、以上に引いた新聞記事やルポルタージュに書かれている如きものであつた。

賢治のテキストは、タイトルを合わせて僅か七行の短いものであつたが、混雑する食堂のなかの印象的な瞬間のスケッチになっている。

公衆食堂（須田町）

あわたゞしき薄明の流れを

泳ぎつゝ、飯を食むわれら

食器の音と青きむさぼりとはいともかなしく

その一枚の皿

宮沢賢治のスケッチ「公衆食堂（須田町）」（『東京』ノート）所収）について

硬き床にふれて散るとき

人々は声をあげて警しめ合へり

黄昏時から夜になっていくあわただしい時刻の公衆食堂のスケッチである。貝塚洪六のルポにあるような「室が狭い、光線が少い、風通しが悪い、食卓も器具も皆きたない」食堂の実際は、「薄明」の薄明るさよりも、薄暗さの感が強かったらうと思われる。この薄明の中で、「泳ぎつついそぎ飯を食む」。「順番を待ちかねてゐる人達は、前の人の立ち次第、争つて其のあとを腰かける。直ぐに又膳が来る。間もなく平らげて立つて行く。」（貝塚）というように、次々と食べては交替してゆく労働者たちの動きを、このように描く。そして、スケッチをする自分もその「われら」の中の一人なのだ。ここでの食事は、「入り遅れて土間に立往生の面々の表情は見るから惨めで場内に充ち渡る食器の響きの内に他の貪り喰ふ有様を咽を鳴らして待たねばならぬ」（一九二二（大正10）年十月五日付東京朝日新聞五面）、「食堂内には百人近くの人がギツシリ詰つて、桑を食ふ蚕の如く黙つて、只黙つて、飯を掻込み、豚汁を啜つて居る、」（一九一九（大正8）年二月二十日付読売新聞五面）などと新聞記事にと書かれるように、黙々と「貪り喰ふ」もので、音といえば「場内に充ち渡る食器の響き」のみであつたようだ。このようなひたすら餓えを満たす為にのみ食べる様を、「食む」、「青きむさぼり」と書く。そして、そのような食事を「かなしく」とまとめるのである。そんな中で、一枚の皿が床に落ちて割れるときばかりは、「黙つて、只黙つて、飯を掻込」んでいた人々も、「声をあげて警め合」うのだ。警め、注意するのは一つの声ではない、いくつもの声が飛び交っている。動物のように、「むさぼり」「飯を食む」われらも、この時は、「人々」として「警め」るのである。浜垣誠司氏はここに、「この食堂に会した他人同士の間に通じている、何かの「仲間意識」のようなもの」や「その都会で懸命に日々を生きつつ今夕たまたま一緒に飯を食っている者同士の、そこはかとなない「連帯感」（ウェブサイト「宮沢賢治の詩の世界」、2008年2月2日）「公衆食堂（須田町）」について(1)を読んでいる。私は、そればかりでなく人々が「警め合」う姿に、中下層階級の人々の生活倫理のしつかりとした現れを読み取る事も出来ると思う。

その他様々な解釈の可能性はあろうが、宮沢賢治は、このスケッチで自らの意味づけを語ってはいない、ただ、そのような人々の変貌の瞬間をスケッチするばかりであった。これは、上京以前の花巻・盛岡での生活の中では、体験できにくかった種類のものではなからうか。最初に確認したように、筆耕作業のわずかな収入のなかで奉仕活動が続けるといった、経済的には困窮するもの一人として中下層階級の人々が利用する公衆食堂に入った際に眼にした一つのこととは、それまでの体験のなかにはなかった、人間の姿を発見する事になったのではないか。そして、それはこのような場面として語られる事で宮沢賢治にとってのスケッチ・詩（文学）として成立したのだ。そのように私は考えるのである。

もう一つだけ、このスケッチの意義についてつけ加えておきたい。ここで、重要なのは、書き手（賢治）は、貪り食う「われら」が変貌するかのような一瞬を切り取ってテキストとして定着させている。その際に、対象を客観的にスケッチするばかりでなく、書き手（語り手）自身も登場人物としてスケッチされる、新しい方法へと踏み出しているスケッチであるということに注目しておかねばならない。これは、この後しばらくして、心象スケッチとして、全面的に展開される方法のひとつの先駆けなのである。

注

- (1) 二〇一九年一月現在、「緑いろの通信」の2008年3月3日号は、アーカイブ化されている為、加倉井氏のウェブサイトから引用する事が出来なかった。
- (2) 加藤時次郎は、大正二〇年前後に、加治時次郎と改名している。
- (3) たとえば一九一九（大正8）年三月二九日付東京朝日新聞朝刊五面には、次の記事が掲載されている。なお、以下、東京朝日新聞の引用は、朝日新聞縮刷版及び「朝日新聞 聞蔵Ⅱ ビジュアル」からのものである。

東京新景—飯食堂



東京新景—飯食堂

この写真は、東京の新景として、飯食堂の内部を捉えています。多くの人々が長いテーブルに座り、食事をとりながら会話を楽しんでいます。背景には厨房の様子や調理器具が見え、活気ある雰囲気が伝わってきます。

(4) 当日掲載の写真は、次のもの。壁際に並んで席の空くのを待つ人々の姿が見える。下段は、一九二二年一〇月五日付東京朝日新聞夕刊二面掲載の写真。さまざまな客層がうかがえる。

東京新景—飯食堂



この写真は、東京の新景として、飯食堂の内部を捉えています。多くの人々が長いテーブルに座り、食事をとりながら会話を楽しんでいます。背景には厨房の様子や調理器具が見え、活気ある雰囲気が伝わってきます。

東京新景—飯食堂



この写真は、東京の新景として、飯食堂の内部を捉えています。多くの人々が長いテーブルに座り、食事をとりながら会話を楽しんでいます。背景には厨房の様子や調理器具が見え、活気ある雰囲気が伝わってきます。